

北方騎馬民族の足跡を探る (一)

藤井秀夫

私は、かねてから、わが国上古文化の形成とその成立に就いて、かなりの疑問と関心を有していた。それは、学恩を蒙ることの久しき丸山二郎教授(国史学)、江上波夫教授(東洋史学)の親切な御指導の賜によるものと銘じている。従って何時の日にか、わが目で直接に、或いは間接的にわが国上古文化の形成と発展に、深かい関係を有したであろうと想像せられる北東アジア、中央アジア、中近東地域を、踏破してみたいと念じていた。たまたま、昭和四十二年七月、本学国史学科の長崎県対馬嶋における古文化調査において、黒田省三隊長等が際会した、同地人による、馬鐸・巴形銅器・銅劍等の綏遠青銅器文化の発見、更には昭和四十三年十二月、本学考古学教室の大川清隊長による九州福岡市那珂川町所在の牛首団地古墳群の発掘調査結果から判断し、大陸横断旅行の可能な時期で、できるだけ早い機会を擲んで、このかねてからの宿望の実現をと、旅程の計画を樹てるに至った。

私の調査旅行の目的を整理すると次のようになる。

- (一) わが国上古文化形成に、強い影響を与えたと考えられる、アジア乾燥地域の各騎馬民文化の文化財の比較研究。
- (二) 彼らの現在の生活様態を地理的環境との関係において、具さに観察する。
- (三) いわゆる遊牧民と農耕民との接触関係、従ってアジア遊牧民文化の農耕

化の過程を彼らの文化財等を通じて観察する。でき得るならば、欧州地域に移動した遊牧民、殊にその内で騎馬民の場合も、アジア各地域との比較研究の意味において調査する。

かくして、大学当局の許可を得て、五月十日、単身、出発と決定した。これよりさき全行程について、改めて江上波夫教授から詳細に適切な御助言を頂いた。次に調査旅行行程を述べよう。目的が右のような次第であるため、当然、主たる旅行地域は、内陸アジアの乾燥地域からオリエント各地域に、的がしぼられてくる。つまりソ連邦中央アジア、イラン、アフガニスタン、イラク、シリア、レバノン、トルコ、エジプト、次いでこれらの地域に深かい関係を有する、東地中海沿岸のサイプラス、ギリシア、パキスタン、インド諸国がこれに該当する。

五月十日、初夏の強い日射しを浴びて、横浜港を出港。五月十二日、夕刻桜梅が可れんげに、花開くナホトカに上陸。この日から百五十四日に及ぶ、大陸横断の旅が始まった。

ナホトカ港の海は、紺碧に澄み切り、ポプラ・白樺が、澄み切った青空を支えているかのよう、大陸的な景観で人を圧している。

(1) ナホトカから、ハバロフスクへ。この区間は極東鉄道の国際特別急行「ダリニ、ヴォストーク号」で、起伏豊かなシベリアの荒野を疾駆する。ウス

リー川水系に点在する農村聚落は、湿潤地帯を巧みに活用して、灌漑水路を造り、他方、ポプラ・白樺・泥柳・松・杉等の灌木が黒々とした土壤に繁茂し、全く森林地帯の景観を示し、狩猟、漁撈民文化の生活環境を提供している。

(2) ハバロフスクからヤプロノイ山脈を越えて、バイカル湖畔の、サーヤン山脈北麓に、抱えられたイルクーツクへ。

この区間は、ジェット機。地貌は一変し、茶褐色の岳陵地と岩沙漠地帯が荒野の如く、果てしなく展開する。時折り白く光って蛇行するものがみえ、涸河の河川流路が氷結していることを示す。イルクーツクより、早春の草に萌えたつバイカル湖畔へドライブする。バイカル湖の大半はなお冬眠よりの夢、醒めやらず、氷結中。ただ一の流出河川であるアンガラ川のみ青々とした水をたたえて、バイカル湖より、エニセイ川へ、紺碧の水をたくましく運んでいる。湖畔附近の沼沢地は、シベリア特有のツンドラの一面を特徴づけ、春の草花が一斉に湿潤地帯に咲き乱れている。森林地帯に散開する、太い丸太を横桁に組んだ農家は、わが国木造文化の代表の一つと見られる校倉風建築構造に類似しており、敷地の周囲には木柵を設け、その中で牛・アヒル・鶏等の家畜が飼養されている。家毎に白・緑・茶系統の塗料が施こされ、また窓枠の周囲や、入口の扉に、出身氏族の紋章と、出身地を明らかにする徽章が彫り出されている。そのような木造家屋の建造景観は、イルクーツクの市街にも随所と見出された。

これ等の旅程を通じ、またハバロフスク、イルクーツクの民俗博物館陳列の文化財等から考量し、特に上古において、日本海をはさんで、わが国と沿海州地域（アムール、ウスリー水系）、東シベリアの広範囲にわたる狩猟・漁撈・農耕に関する共通の極東文化圏成立の可能性を考へることができよう。

朝鮮半島、日本海はわが国と沿海州とを結びつける横断通路と考へたい。

ハバロフスク、イルクーツク博物館陳列品中、特に注目しに価されるものは、(一)校倉風建築物は、ここ東シベリア地域からカザフ共和国の草原帯の遺跡の

住居址、墓址にも共通に見られる構造であること。(二)馬鐙、初期須恵器（TK二三型）、(三)広銅銚、銅劍、銅釣針等の埋藏量の豊富なること、(四)更にスキタイ式青銅製、鉄製の刀劍、馬具文化等の所在から、スキト・シベリア・綏遠金屬器文化の広範な分布について、確認を得ると共に、わが国縄文期、弥生期より、古墳文化の形成と伝播について、新しい構想を抱くに至った。

(3) イルクーツクから、西シベリアの中心的都市であるノボシビルスクを経て、カザフ共和国の首都アルマータへ。双発旅客機で。

アルマータは天山山系アラトウ山脈の北麓に造られたイリ川水系のオアシス都市。アルマータはこの西方のフルンゼ（キルギス共和国の首都）と共に、ズンガリア盆地（天山山脈とアルタイ山脈の間に介在する）から通じてくるウルムチ、クルジャからの天山北路の街道筋に当る。紀元前七世紀頃以降前四世紀にかけて、塞族が満目荒涼のこの内陸アジアの乾燥環境を舞台として西のスキタイ、東の匈奴と文化交流をしきりに重ねて、その勢威を東西に揮った中心的地域が、このカザフ共和国、並に西隣のキルギス共和国に当たると。烏孫はその後この地域に登場し、漢・魏・晋・南北朝時代の東西交渉に、西隣の大宛（今日のウズベック共和国地域）と共に、時代の脚光を浴びている。

ここで、カザフ大学、カザフアカデミーの諸教授と、東西交渉史上における、塞族、烏孫族の果たした歴史的役割りと、彼らの文化性より論じての同族論、スキタイ文化の内容と価値、中央アジア各地域の騎馬民と漢民族との諸交渉、漢民族の西域版図の問題、また所謂「シルク・ロード」の性格とそのルート等の諸問題について、数次にわたり討議した。同地博物館陳列品は明瞭に、スキタイ文化が塞族・烏孫族・匈奴の文化と、そして更に東漸して、東シベリアからシベリア沿海州、わが国へ及ぶ、極東文化圏文化への連りを示めしていた。スキト・シベリア金屬器文化の痕跡は、想像以上に数多くの民族へ、数時代を重ねて浸透しているといつてよからう。アルマータより、初夏の五月なお

雪溪を刻むアラトウ山脈へ、また、桑の大樹の繁る往次の天山北路を訪ねて東へ、イシク村付近までドライブした。雄大な放羊隊の生活に始めて遊牧世界の実感に浸る。この草原の道をよぎり、幾多トルコ族系の集団が或は騎馬隊で、或は穹廬(包)を馬車に乗せて移動した往時が彷彿として、よみがえる。

(4) アルマータより、双発旅客機はチュウ川を越え、タラス、フアラブ等のオアシス都市を眼下の荒涼たるデザート地帯の一隅にとらえつつ、シルダリアの要衝、タシケントに着く。

内陸アジアの乾燥地帯において、比較的、共通した現象は、松田寿男教授の指摘する通り、満目荒涼たる岩砂漠地域に、随所、レモンを割いた形の緑地が発見されることだ。それが所謂ステップ地域で、これには種々の型がある。最も多い例は、砂漠中の涸河が地表下を底流し、低地においてオアシスとなつて、地表面に湧出する場合である。この場合、解氷期になると、涸河は地表面に溢れ、あたかも内臓を養なう毛細血管のように、低地全体をうるおす。機上から見る涸河の発達(解氷期の場合、デザート地帯を流れてくるが故に、茶褐色を呈している)全く蛇行そのものであるため、河川の争奪による砂洲の発達現象も明らかに観察することができた。

タラス、フアラブといったデザート地帯を点々と東西に結ぶオアシス国家も、このような自然条件を利用して、逐次開発された都市と考えられよう。

(5) タシケントでは、歴史博物館、民族芸術博物館を見学、私の研究上、紀元前八世紀より、西紀八世紀の文化財を丹念に調査した。

特に私の注目を引いたのは左記の要目である。①塞族文化に、後日、キエフ博物館、同考古学博物館、レニングラードのエルミタージュで特別見学を許されたスキタイ文化との関連をたしかめた。②ソグディアナ、バクトリア地域の文化が、アケメネス・ペルシア帝国、アレクサンドリア王朝、バクトリア王国、大宛、大月氏、貴霜王朝、エフタル、西突厥の各時代を通じて、多彩に変

化している実態を認識。③所謂シルクロードとオアシス都市が時代毎に、開発されていくことに就ての歴史学的、社会学的研究が、逐年この国において、大いに進められている実情を認識。④各オアシス、ステップの都市毎に、異なる民俗の特性を象徴するデザインを施した服装、建築デザイン、生活用具デザイン、楽器等に注目した。事実、街を行く現地人の服装、また、民家の建て方、調度品、織物、陶器等の製品を見るにつけ、共通なものの中に都市毎に、共和国毎に、凶案・色彩・着装等にそれぞれの文化特性を発見し、各文化圏の範囲と文化伝播の実態を確認し得た。つまり、ソ連邦においては、共和国毎に、それぞれ固有の歴史的文化を所有し、かつ、それがいかに如実に表現されることについて認容されている。これは非常に学術調査上興味づけられる資料となる。

またタシケント大学、オリエンタル・インスティテュートの教授、ウズベックアカデミーの古代史の専門学者と会談し、特に遊牧民、騎馬民が、ステップとオアシスを如何に活用して、彼らの文化を発展させたかを具体例について討議すると共に、キャラバンルート(シルクロードの本質)について、ソ連邦科学者の新しい知識を看取することができた。(キャラバンルートと、シルクロードとは明確に峻別されて把握されている)

更にウズベック人の日常生活の中に深く根を下しているイスラム教信仰と音楽愛好の民俗に、国境を越えて分布する乾燥アジア民族の共通性と、この地域の特異性を窺い知ることができた。(楽器と音楽それ自身が非常に特色的である)

太鼓(打楽器)は、すべての弦楽器に優先して、リズムを奏で、人間性に富んだ歌詩を導き、熱砂に渴えた民衆に、イスラム教徒としての神の恩寵と休息を、また人としての同胞愛と慰いと与えている。晝闇より、深更に及ぶ打楽器の音に支えられた中央アジア人の生活にとつて、鼓音に依る音楽は深かい敬虔なイスラムへの祈りであり、それは同時に人間性に潤いと愛と生きる自信と

を与えるものであった。西紀七世紀以来このかた、流砂に生きる、幾多の民族集団を共通の精神的風土にまとめ上げ、そこに略々類似の文化形態を生じさせた所以のものは、乾燥気候と地形を共通にするという自然環境それ自身と共に、やがてその諸条件より生み出された彼ら自身の宗教、イスラム教であったともいえる。かくして熱砂をラクダに揺られながら緑のオアシスへと旅をつづける騎馬の民の、心を潤おし、明日への希望と活力とをもたらしことの必要がリズムミカルな太鼓の音を生み、また生命力の象徴とし、青磁色に輝くイスラム寺院と、昼夜を分かつたず、彼らに、希望と道標とを与えるものとして、光塔を考案させたと解し得よう。例えば太鼓の音に調子をとられて、草原に踊る民俗舞踊の影に遊牧民の楽しき生活の一齣を十二分に窺い知ることができよう。

(6) タシケントから、シルダリア上流盆地の中心地フェルガナへ飛ぶ。

天山山系が東西へ幾重にも連互し、キジル・クムにその姿を没する西端を飛行する。正しく、天山半島といわれている形容がびつたりとあてはまる地貌であり、天山山系の雪どけ水は同山系の襲を縫って落下し、更に岩砂漠に鋭い河床を彫り刻み、その茶褐色の濁流はシルダリアへと流れ込む。シルダリアはこおした天山山系の水を集めては蛇行し、砂洲を発達させては、それによって処々に茶褐色によどむ自然の塞ぎ止め湖を造り、水量を調節しつつ、流路に、灌漑平野の可能性を与えながら、キジル・クムへと流れ去る。レニナバード付近では、青々と澄み切った塞ぎ止め湖が東西に二つ並んでいる。これが岩砂漠地帯を流下してきたシルダリアの茶褐色の濁流を呑んで造られたとは思われない程の異観であった。シルダリアから引水された二本のフェルガナ大運河は、更に無数の灌漑水路を分岐させ、区轄整理を整然とさせて、プランテーションを発達させている。小麦・とうもろこし等の穀物類、ブドウ、棉花等の大農園、そして桑の大樹が各区轄の農園を区切り、豊富な穀蚕地帯がここ、フェルガナ盆地に展開している。フェルガナ市郊外、北方六十キロの地点に在るマ

ルゲランは、正しく、古代から今日にかけて、このフェルガナ盆地における、穀蚕地帯の中心地とみる。

遠く東の彼方、南山山脈がタクラマカン砂漠に没する処で分岐した天山南路、天台北道はカシュガル付近で再び合流し、テレク峠で天山の峻険を越えアライ高原へと斜面を下り、オッシュュアンディジャンを経て、フェルガナ盆地中心のマルゲランへ、そしてコーカンド↓コージュント↓サマルカンドへ達している。この東西交渉のキャラバンルートは前二世紀、大宛、大月氏王国の開發したこのフェルガナ穀蚕地帯を通過している。塩性土壌に栽培されている棉花、天に聳える桑の大樹、赤大根、人参、ねぎ等香りのある野菜等ウズベック農業と、絹織物工業のすべてが、ここフェルガナ盆地に集約され、また部落の道路筋には、楯比する所謂、土屋平頭式の民家と、美しい民俗衣装を身にまとうて緑の農園を耕作する農民、驢馬の群等、オアシス地域特有の農牧民文化の特性が指摘される。天山山系のアラトウ斜面に造られた、マルゲラン、フェルガナ、ヴァーディルは正しく、豊富な水量が利用できる、乾燥地域文化社会の代表的な農蚕業聚落とみてよからう。

フェルガナ博物館の陳列品には、スキタイ式塞族文化の浸透を見ることができると共に、大宛、大月氏、貴霜王国のものに加えて、西紀十世紀頃のカラハーン朝文化財に極めて特色的なものが多く、ここに定着した騎馬民の農牧民の特質を示している。

(7) タシケントから、キジル・クム砂漠を越えてサマルカンドとブハラに出る。

サマルカンド空港はアフラシャブの丘(旧サマルカンドIIマラカンド)の内懐に抱かれ、その付近を、ザラフシャン川より引かれた運河が縦横に走っている。マラカンドと云われた紀元前四世紀の都城址、アフラシャブの丘に立つ。アレキサンダー大王の遠征軍団の馬蹄が、地底を揺さぶって聞えるようだ。そ

して、西紀十三世紀コラズム帝国の中心都市として復興したこのサマルカンドを徹底的に侵略したのは、チングス汗であった。満目蕭条たるアフラシヤブの遺跡は、そうした意味で、近郊の古代ベンジケント遺跡と共に、われ等を寒々しい幻想の世界へ誘いこむ。サマルカンド、ブハラには、チムール帝国以降の余光を伝える文化財が多く保存されており、当時のイスラム建築を回想するには絶好の材料といつてよい。中でも、崩れかかったビビ・ハヌイム寺院（チムール建立）の雰囲気は、その建立の経緯を知るものにとつてたしかに異相といつてよからう。サマルカンドより南東百六十キロ、ステップ地帯を縦走し、天日製煉瓦で建築された現代ソグド人の民家と農耕風景を観察しながらウズベック共和国から、タジック共和国内に在る、古代ベンジケントの遺跡を訪ねる。

西紀八世紀の半ば、怒濤のように侵入してきたアッバス王朝サラセンの侵略によって、敢えなく潰え去った、ソグド人の大都城址である。（都城の大きさは約二十ヘクタール）パミールより連互するトルキスタン山脈は万年雪を載いて、峨々としてベンジケントの背後を抑え、ザラフシャン川の清流は、ザラフシャン山脈の山裾を洗って丘上の古代ベンジケント都城址を囲み、それより引かれた灌漑水路は、農園をうるおしている。この広大な廢墟を歩く時、天然の要害に支えられて、はなやかで平和な農牧生活を送っていた古代ソグド人の生々しい生活が、今なお足下にころがる土器の破片、壺、人骨等から悲しみのリズムで伝えられてくる。現代ベンジケントのベンジケント、またサマルカンドの博物館ではスキタイ文化と共に特に西紀前後に伝えられた所謂ヘレニズム文化と回教文化財が一見に価し、文化複合体の形成について、漸次の伝播受容と変容、また突然的断層の諸型態を興味深く観察することが可能であった。

アマダリア、ザラフシャン川の氾濫原を利用して、熱砂の中に造られた灌漑都市ブハラは西トルキスタン随一の、中世から近世にかけての回教文化財を残している。それは回教建築研究に好材料を提供していると同時に、バザール、

ヌイ・クーボル（商店街、手工製品の生産、直売街）は、後日、観察したイランのシラーズ市のそれと共に、一見に価しよう。ここはアッラー神への祈りを求めて集まってきた民衆が熱砂の中を運んできた隊商団と交易する処でもある。ステップの中に幻の如く、孤壘として残る市壁や城門にも、シャイバニー土朝、ブハラ汗国の余影を感じた。またエミール宮殿内に保存されているわが江戸時代及び清朝の花瓶を見出したとき、東西交渉の現実をしみじみと味わい、ひとしおの感を深くした。

ブハラよりザラフシャン川に沿って、ウルゲンチ街道を北西のヒヴァ方向へ進む。三十キロも走れば、キジル・クム（赤い砂）が展開する。野菜、穀類の栽培地から、ラクダ草の繁茂するステップ地帯、そして砂漠地帯へと環境の變化は南北に著しい。

ソグド人達はこのザラフシャン、アマダリア流域に、塩性土壌克服の排水、灌漑水路を営々として造りながら、点々と多くの都城を天日製煉瓦を積み上げて営んだようである。ラクダ草の茂るステップ中で、そのうちの一つを新たに発見した。五丘より成るこの廢墟を踏みしめ、感無量であった。この規模は、はるかにヒヴァに及ばぬとしてもその様式は明らかに内城と外城をもつ、二重構造であり、とくに主丘（略々一里四方）の築城法に大きな興味を覚えた。丘壁の高さは約八十米、塼と天日製煉瓦を組み合わせて積み上げ、泥壁で塗り固められている。累々として丘上に散乱する土器の破片の中には、厚手赤褐色、口縁部に楕目文、また赤褐色で壺型、腹部に押型文があり一見して須恵器程度の硬さと覚しきものが認められた。西紀四、五世紀頃の都市、城塞と見られよう。

また、同地が、ザラフシャン流域よりさほど距たらぬ地点より推して、人々のオアシス造りの可能性があったであらうし、何等かの事由によって、都市が放棄されれば、水源の活用方法は閉ざされ再び元の乾燥地貌に一変されるといふ、内陸アジア特有の史跡を如実に示すものであらう。またキジル・クムに進

し、ラクダ、羊を飼育するカザフ遊牧民の包(穹廬)の構造と、その生活の実態をも、とくと観察することができた。

(8) タシケントから、キジル・クムを越えて、アムダリア下流のウルゲンチへ。そして、ヒヴァ汗国の都城であるヒヴァを訪ねる。

遊牧生活に必要な包の骨組みとなるカラガチがアカシアと混じって繁茂している。ヒヴァ城の二重構造(内城と外城)、市民の住宅の建築構造(木芯と木郭に天日製煉瓦を落し積みのような形で複合させている)、バザール、回教建築物等、余りにも多くの貴重な文化財が今なお生きつづけ、市民は往時さながらに、内城内での生計を営んでいる。自転車を受用する市民、日焼き煉瓦製の記念物建築や民家の中を自動車が行く。一寸した奇妙な異景だ。また内城内のバザール、イスラム教会、ヒヴァ汗王宮内に溜められた池、深く掘られた用水井戸、王及び王妃の浴場等は、水系に沿って造られたオアシス都市の特色を明瞭に示めている。

(9) タシケントから、タジック共和国の首都のドシャンベへ。

アジアの屋根と云われているパミール高原から分岐するヒンズークシュ山脈は幾層にも東西に連互し、その山褶から、アムダリア水系を起し、その峻険なる鋭峰と、アムダリアは、今日のソ連邦タジック共和国、ウズベック共和国とアフガニスタン王国との境域を限って走る。それだけに、タシケントからドシャンベへ飛ぶ航空機でさえ、しばしサンディーストームに妨げられる。私も約十四時間、自然の怒りが静まるのを待機したほどであった。万年雪で被われたヒンズークシュ山系の峨々たる鋭峰は、まるで櫛比するのこぎりの歯立てのようであり、航空機の底腹が何時えぐられるかとの不安に馳り立てられたほどであった。赤茶色に濁ったパミール川、ワハン川は蛇行して、その重畳たる山また山の谷間に針がねのように、細くて強靱な通路を開いている。遠く前十八世紀前後には、幾度もアリア系諸集団の騎馬の兵団が、キジル・クム或いは、カ

ラ・クムをシルダリアやこれらアムダリア水系に添って、インドスへ、或いはイランへの通路を探索したのであろう。またアレキサンダー大王以来、ヘレニズム文化を運載してきたギリシア人達が活躍したのも、このトハリスタン、パクトリア地域であった。

中国の黄河流域から、タクラマカン砂漠の南側を通過して、コータン、ヤルカンド方面から、トハリスタンへ抜けるいわゆる「絹の道」天山南道はこのタジック共和国の南東部を通過し、タシュケルガン峠から、ワハン川の渓谷ぞいに、アムダリアの谷間に入り、アフガニスタン境域のバクトラへと通じるバダクシャンルートをとる。パクトリア王国、大月氏王国クシャン王朝は、このバダクシャンルートを擁し、ソグディアナ、フルガナ、トハリスタン、バクトリアの中央アジアを領有しつつ、中国、インド、イランを結締する東西文化交流の仲継地域を構成した。従ってドシャンベ博物館には、稀にみる東西交渉史上の貴重な文化財が多く保存されている。特にスキタイ系の塞族文化、ヘレニズムのガンダーラ文化が注目しに価する。タジック共和国アカデミーの学者と、殊にスキタイ、サカ文化の影響とその文化圏、また両者の民族性、更には仏陀彫刻の発見及び発掘情況等に就いて、きわめて有意義な意見の交換を行なった。因みにアムダリアを挟んでタジック共和国と、ウズベック共和国及びアフガニスタンは、テルメス、バミリアンを経て、カイバル峠を通じて、ブルシャプーラに達する仏教求道の街道筋に当たり、玄奘三蔵もサマルカンドより、このテルメスコースを取って、インドへ入っている。

(10) タシケントから、無気味に光るカラ・クム砂漠を越えて、トルクメン共和国の首都アッシュハバードへ出る。カラ・クムはその文字通り、黒い流砂が蛇行し、重なり合って南北に連っている。イランとの国境を画するコベック・ダグ山系は、まるで砂漠の中に突出している半島のように見える。現在の同市は、この山系より流入する幾本もの涸河と、遠くカラ・クムを横断して引水

されるアムダリアからのカラ・クム運河によって、ステップ中に開発された。東南へ八キロ走った郊外に、オリエント農耕文化を内陸アジアのオアシス都市に伝えたアナウがある。同地周辺には、今なお、オアシスが指摘され、それらが小川となって、北丘・南丘を中心として広々と展開している農牧地を養っている。紀元前四世紀以来、ヘレニズム都市として開かれたセレウコス王朝のニシヤプールは、アナウ遺跡に対面し、アッシュェハバードから西南へ約二十キロ、コベット・ダグ山系中に開かれたオアシス都市である。カスピ海斜面に沿い、東のヒンズークシュ山脈に連互するこの山脈は、中央アジアの西境を形成し、イラン地域からソグディアアナへ通じるキャラバンルートとを、その山中より流れ出る無数の涸河によって養なわれたオアシスを造りあげることによってオリエントと中央アジアを結ぶ文化伝播に貢献してきた。

トルクメニアンとタジック人に、強いイラン系色彩を感じ、ソグディアアナを中心とするウズベック人にトルコ系民俗が、また後日、訪問のアフガニスタンに、タジック共和国人と殆ど共通の生活文化を指摘できるのも、内陸草原の民族交流の複雑さに負うといつてよからう。

さて、これより、中央アジアと別れて、コーカサス地方へ西行したが、内陸乾燥地のオアシス地域に共通に観られる現象の一つに、花卉の美しいこと。特に、バラ等の赤系統を始め、黄・青・紫といった原色が目にしみる。またリンゴ、桃李、ブドウ、いちご、西瓜等の果樹果草や、大根、赤かぶ、馬鈴薯、胡瓜、玉ねぎ、人参、せり、にんにく、三つ葉、パセリ等の野菜がなつめ果樹の実と共に豊富なことに、驚愕した。これ等起源地の詮議は別として、流砂の中を幾本にも分かれて走るキャラバンルートは、東アジアと西アジア、更にヨーロッパにも達する大幹線ルートであった事は確かな事である。

また、中央アジアは、云う迄もなく、漢の武帝の、大宛遠征の、原因から考えて、馬の産地であることは、論を俟たない筈である。所謂、汗血馬の産地

は、別に詮議されるとしても、ここ迄、ソ連領中央アジアを遍歴してきて、我々の通常の観念としての馬は、よほど注意しなければ、その姿を見せないということであった。僅かに、ブハラ、ウルゲンチ間のステップ、またアッシュェハバードの近郊に、放牧されているに過ぎず、現実の農民、遊牧民の生活伴侶として、農村、ステップ、都市において、愛用されているのは、小型の馬（驢馬）である。驢馬の使用度は今日、内陸乾燥アジアの何処においても、指摘され、エジプト、トルコ、レバノン、サイプラス、クレタ、ロードスの東地中海地域に迄流布され、かつ、一転し、インド迄及んでいる。この馬型が、汗血馬の系統に価するものか否か、しかし、トルクメン共和国に、かなり広く放馬されている通常の馬型（アラブ系混血か）から推して、両者の使用について、疑問とする点がきわめて多い。これに関連し、タジック共和国、トルクメン共和国の女子の服装は、ウズベキスタン、カザフスタンと異なり、民俗服の長ズボンを着用し、更にその上に民俗服の長衣を着用し、索頭風を粧っていることは乗馬民俗の遺習と見てよいであろう。

(11) コーカサスに飛び、グルジア共和国のトビリシを訪ねる。

十一世紀にグルジア王国が建国されて以来、ティフリシと呼ばれていた首都がここである。クラ川に沿って河岸段丘を利用して発達した城塞都市であり、コーカサス特有の色彩豊かな石材を建築材としており、エレバンと同様、市街は階段状に計画され、灰色の砂漠的景観から一変して、目を奪われるほど美しく明るい街である。この地域の歴史は印欧語民族のオリエント世界、東地中海地域への進出に伴って、輝かしく、世界史上に登場し、尚武民族としての誇り高き、ヒッタイトがまづ先駆し、キンメリア人、スキタイ、アルメニア人達の活躍によって飾られている。

クラ川の背後丘陵を利用してワフタン・ゴルガサ王が四世紀に構築した城壁、また、都市の中心部にある教会兼城砦のメチエヒ寺院は正しく異観であ

り、古代都市計画の断面を特徴づけている。郊外ムツヘタには、クラ川とアラグビ川の合流地形を利用して堅固な城邑ワフタン・クロガサリ王（パクラチオン王朝の建設者―四世紀―）の王宮が建設された。同地で保存されている十一世紀建造のキリスト教会、スヴェティ・ツホヴェリーの白壁石に、キリスト教の象徴としてのイーグルが飾られていることは当然としても、蒙古軍団侵入の際、これに加えて取りつけられた、茶色タイルのライオン像（イスラム教の象徴）は、正しく対照的で、宗教会に与えた政治勢力が如何に深かったかを考えさせられた。またこの城邑を前記合流地形を距てて、見下す山頂に、デュワレ―教会が四世紀に建てられている。教会内部の構造は、無論、禮拜堂（真東を向いている）中心に營造されているが、それ自体がメチエヒ寺院同様に、兼ねて要塞化されている事に、この後、訪問した東地中海地域及び西欧の、古代・中世寺院に共通な特色を見出した。

(12) アルメニア共和国の首都、エレバンに入る。

トビリシ以上に、街の起伏は著しく、淡桃色、赤色、白色、黒色、黄色と色彩豊かな凝灰岩が、建材に用いられている。エルブルース山脈の貫通する高原に位置するこの街は海拔約千メートルに在ると考えられない程に、近代的景観を備えている。雪を冒したアララット山は、まるで富士山を想わせる美しいスロープをひいている。

西紀前八世紀、スキタイ、キンメリア人は相次いで、南露キルギス草原地方より、怒濤のように、ここコーカサス地域へ進入し、エルブルース高原へ移住と侵略とを繰り返した。こうした中で所謂アルメニア人が形成され、初代王アルギスティッシュ一世が、エルー・プニを建設した。その首都が、ここエレバンである。彼と彼の二男サールドウル王の居城が復原されて保存されているが、馬二頭立ての戦車、馬鐔、武装兵士の青銅製ヘルメット（三角帽）、王章としてのライオン像或いは楔形文字文書に、正しくオリエント及びアナトリア地

方に侵略を重ねた、アール系騎馬民族の遺物文化を確認し得た。その居城址より、略一世紀下ると云われる、「赤い丘」の居城址を、幸いにして、見学することができた。その城門址と考えられる個所に、戦火で焼かれたと見る天日製煉瓦の状況を見ることができ、当時の製煉法が既に藁を混入させている事実を把握することができた事は、期待以上の収穫であった。

(13) クリミア半島のシンフェロポリスに出る。

シンフェロポリス博物館で、スキタイ鉄剣の最も代表的なものを見る。また石板に彫刻された、鉄槌を握る手首、更に前五世紀より三世紀のものと言われる、サルマタイの環首刀剣を見た。後日、キエフの考古学研究所でこの件について論議を重ねたが、環首の形は、スキタイ、サカ族の一種の文字記号とも考えられていた。また銅鐔、広銅銚等を観察して、スキタイ文化の本質と、その伝播の及ぼす結果を熟考せざるを得なかった。

また当地専門家の考えによれば、スキタイの居住は、クリミア半島において、シンフェロポリス・パフチサライ・セバストポリスを結ぶ線の北に在るといふ。これは大いに傾聴すべき説明と考えられよう。（それより南側はタウルス文化、更にはエーゲ海文化圏と考えられている）

シンフェロポリスより九五キロ、南方のヤルタへ向って車を駆る。急激に馬群のふえてくる実態を確認。トルクメン、コーカサスあたりから、次第に所謂「馬」が飼育されている。この点ラクダ、羊、ロバを交通機関、労働力として働らせている中央アジア各地域と顕著に異なる景観だ。

ヤルタから約三十キロ南西に在る断崖の半島部に（シメイズ付近）、西紀前十三世紀頃と云われるタウルス石造文化のストーンヘンジを偶々見出した。正しく僥倖のひとつときであった。その司祭場（グロマレフ）と自然石を活用した石室は一見に値する。石灰岩質のコーシカ（猫の山）連峰を背後に控え、近くに景勝の名高い、キャメル・クリフが聳えている。同文化は黒海北岸におい

て、農牧生活を営んでいたキンメリア人と頗る親縁関係にあると云われている。同地の地形より推し、彼らは農漁を営んでいたのではなからうか。またヤルタ博物館には、エーゲ海域より植民してきた前七世紀頃のギリシア黒陶文化の系列が、おびただしく陳列されている。

アルプカに所在するヴォロンツォフ伯（駐英大使）の別荘もまた、建築構造上、歴史的意義を十二分にもつ。チュードル様式とイスラム式回廊のとりあわせは、余りにも見事である。

アカシア並木に、月見草が咲き乱れ、柄の長いしゃべると馬を操って、玉蜀黍を栽培する農夫に、この地の景観をとらえることができると共に、北欧の農耕法と相通するものを観察した。

(14) キエフで、スキタイ、サカ文化の専門学者達と、考古学研究所で会談し、示唆を受ける。

要約すれば、スキタイ及びサカ民族はインド、ヨーロッパ語系民族の一つで、イラン系に属し、その原郷は、カスピ海、アゾフ海周辺の中央アジア（今日のトルクメン、ウズベキスタン、タジックスタン）にあり、サカ族は、この点で、スキタイ系の集団として、スキタイ主流の西進後も長らく、中央アジアに留まり、騎馬民生活を営んでいたものと考えられる。かくしてその主流であるスキタイが西進し、黒海沿岸地で農牧生活に入り、西紀一世紀には消失する。他の一部は東進し、バイカル付近から極東へと移住を重ね、漠北において匈奴と連絡する。烏孫はトルコ系ではなく、イラン系であり、サカ族の中に包括されよう。従って中央アジアより東及び南西への影響力は、サカ族の活動圏とみるべきであり、スキタイ文化の当該地方への伝播に、サカ族の果した寄与は大であるとする。

しかし、更に検討されるべきは、両者の金属器、馬具文化にかなりの差別的特質が秘められていることであり、ここに乾燥アジアの草原、流砂の世界に演

ぜられた文化圏間の複合文化の形成と伝播について、興味ある試論が幾多展開されることとなる。いずれにせよ、わが国古墳文化に与えし、この種の文化の影響力は、当地歴史博物館、更に幸にして案内された未公開の考古学博物館の陳列品と、諸論文を窺うにつけ、なみなみならぬ関連をもつ経緯をもつものと判断し得よう。

十一世紀に建てられたウスペンスキー寺院に、キリスト教信仰のため、迫害を受けて倒れていた修道僧の洞窟跡を見る。正しく、後日訪ねたローマのカタコンベ以上の洞窟教会兼墳墓であり、肅々たる感慨に浸る。同寺院洞窟の外側には、カール十二世の率いるスウェーデン軍のキエフ侵寇に備え、ピーター大帝の造営した城壁跡の堀割りが生々しく、煉瓦と石とで固められて残されており、教会建築それ自身が、一種の砦と使われた一例と見ることができよう。十一世紀に造営されたキエフ城壁の城門（金の門）もまた、煉瓦と石を組み合わせて、積み上げた堅壁であった。

(15) モスクワオ歴史博物館を見る。注目されたのは、前五世紀より二世紀における、黒海周辺地域より出土したギリシア黒陶、また略々同世紀に、サルマタイ文化圏において発見したギリシア式図案の諸資料、全ソを通じてのスキタイ、サルマタイの諸金属文化、例えば、金属製の面繫（おもがいがい）・鞞（しりがい）、動物裝飾の刀剣、短甲、挂甲、胄、金銀製の腕輪、首輪、金、銀、錫製の食器、青銅鏡、青銅製食器、銅鐸、寶石連珠の首飾、更には渦卷文等を配した彩陶等、いずれも中央アジア、極東アジアの諸博物館において、既知の文化財であり、スキタイ文化の精緻、絢爛さに印象を深くするものであった。かつ、甲冑、挂甲、馬具類は、わが国上古のそれと、軌を一にするもので、スキタイ文化のわが国に及ぼす影響の度合いを深く感じた。従ってその文化中心地の諸特性と、文化圏の地域的広がり、特性複合体としての文化伝播の実例の一端を窺い知ることができ、併せて前六世紀―四世紀における、クリミア地域の

タウルス文化の中にも、スキタイ文化の流れを認めることもできた。

十四世紀後半以来、クレムリンの防衛塔として築かれたノボヂェビッチの城砦は、当時のクレムリンの構造様式を伝えるものとして、一見の価値があるし、この城砦の中に、尼僧院が作られている。クレムリンの場合にしても、その構内に多くの教会、僧院を内蔵している。

(16) レニングラード、エルミタージュ博物館を訪ねる。

同博物館でスキタイ文化の専門学者達の新鮮味あふれる見解を聴取すると共に、スキタイ文化に関する、すべての文化財、殊に同博物館所蔵の「金の部屋」の特別見学も許された。創見として、左記諸点は十分留意するに価しう。

(1) スキタイ独特と云われる金細工、動物意匠の物質文化について、ヘロドトス報告のアガフィルス(ダキア人)の金、銀細工を検討せねばならない。つまり、スキタイがドニエプルよりヴォルガ河流域に定住するようになった前七―六世紀以前、更にはサルマタイが、更にヴォルガ、ドン河付近まで進出してくる以前、少なくとも前七―九世紀頃のドナウ河流域の文化圏とその文化性について、研究せねばならないとしている。アガフィルス文化には二つの文化中心地があり、一は今日のルーマニア、ハンガリー地域、一は今日のブルガリア、北部ギリシア、アルバニア地域、即ちトラキアであるとす。これらの地帯に、独得な産金地ありとし、アガフィルスの積極的な貿易活動を通じて、一は動物意匠を得意とするスキタイ工芸人に金細工による手法が伝えられ、またその反面、アガフィルスの金細工文化と共に、スキタイ動物意匠文化がエーゲ海各地域へ伝達されたものと見ることができようという。

(2) スキタイは一般にイラン語系民族と解しようが、その民族文化形成に、これらダキア、トラキア地域集団との複合を注意しなければならないであろう。特に、面繫・鞞等の金製馬具はトラキアから、スキタイへの移入である

う。因みに、西紀前五世紀南アルタイのバズリク文化中にも木製の面繫等が発見され、馬具文化の東漸と同時に、アルタイ・スキーフの存否について、重要な手がかりをとらえることができるという。

(3) 当然のことながら、サルマタイ動物意匠文化にもトラキアの文化の影響力は強く、なお参考として、トラキア人は素頭しているという。

(4) 馬の原産地はフェルガナ・ウスン(鳥孫)地方であろう。これより一は西進して、コーカサスへ、スキタイ系遊牧民によって移動したものと考えられるし、東方乾燥地域の匈奴もその東流を受けたものと解されよう。

(5) その他、堅昆、匈奴、鮮卑、鳥孫、アラン、モンゴル・タタール人等相互の関係について、極めて特殊な民族論を示唆された事は、貴重な収獲であった。

私のこの旅は、既述の道程で、二ヶ月を要し、更に約四ヶ月、北欧・中欧・南欧をトランジットして、次の目的地である東地中海地域及び、中近東へ向っている。この間の要約、並に首題である「北方騎馬民族考」は次号に譲るとして、取り急ぎ、この後半の旅程において、報告に価するものを、概略して述べよう。

(1) 北欧スウェーデンにおいて、木造家屋の組積工法として、極めて特色的な校倉造と合掌造法の組合わせを発見した。校倉工法については、既に中央アジア、シベリアにおいて、発掘史跡の資料及び現存の民家においても確認したが、遠く北欧の一部において、わが国でも稀少な組積工法を発見した事は文化形成の一要因として文化伝播を重視する学徒にとって、貴重な収獲であった。

(2) ラップ人の住宅構造を仔細に検証するに、木柱、木郭を軸として、トナカイの皮を使用している。この点、中央アジアの包様式と共通点が指摘されよ

う。また半定住狩、漁民としての諸特性もその住居様式に、表現されており、特に食糧倉庫の構造は、弥生期のものと、かなりの共通性が指摘され、彼らの民族性、文化性は今後更に広い学問分野から追求されるに価しよう。

(3) デンマーク農家の構造及び農村景観を観察するについて、スウェーデン文化圏との間に介在する、共通の文化特性とその差異を認めねばなるまい。概括的にデンマーク農家の特色を表現すれば、極めてわが国の中世・近世期の農家、更にその伝統を継受したと考えられる現代の農家の構造との共通点を見出す。

(4) ライン河沿岸の中世都市ドゥッセルドルフで十七世紀初頭の税関所、古城址を通じて煉瓦積みと石積みによる個性的な工法に、中世より近世にかけての西欧的建造物に開眼を得、対岸の城砦都市ゾンスで、城壁構造と民家様式に、またライン川沿岸に構築された幾多の中世城砦と教会、ハイデル・ベルグにおける名城、更にマイン水系に在る、ヴァッパリアのローテン・ベルグにおいては完璧な城砦構造を残している、中世より近世にかけて築えた教会都市と城壁を仔細に検証することができた。且つこのドイツを中心としたスウイス、オーストリア、イタリアの旅において、特に印象を深めたことは、石造煉瓦積建築の構造に、木郭、木芯が使用されていることである。これを通じて所謂、西欧文化の特性に新たな開眼を得、森林環境と文化形成の關係において普遍的なるものを認めると共に、ゲルマニア系集団がヘレニズム文化の受容における文化変容を考察するうえに、一段と役立つものとなった。

(5) ネアンデル・タール人の住居及び同博物館を訪ね、ドイツ史学界の位置づけているネアンデル・タール人の出現期について確認を得た。

(6) パーゼル郊外のオーガストにおいてローマ帝国末期の貴族の邸宅の遺構、円形劇場、神殿址、博物館等を見ることができた事は、ローマにおけるよりは当地において、むしろローマ文化の断面を窺い得た程の収穫があった。

(7) ミラノからローマ、ポンペイ、ソレント、ナポリ、フィレンツェ、ヴェニス、ヴェロナ、ポロニヤの旅程において、都市構造、建造物、美術等を通じて、古代ローマとヘレニズムの息吹きを味得ることができた。中でも興味を湧かしてくれたものは、メヂチ家によって殷盛を極めたフィレンツェ、アイダを満喫させてくれたヴェロナの大円形劇場、ヴェニスのゴンドラの船型とその漕法であった。

(8) ウィーン博物館で、ハルstatt文化の遺物を見た。スキタイ文化との関連から仔細に点検する。その中で、金細工文化の精緻さから考え、エルミターージュで指摘を受けた、スキタイ文化の一つの特性である金細工文化が、本来、スキタイ固有のものか否かについて、ハルstattの持つ文化性もその鍵をにぎる一つと考えられはしないだろうか。また同文化の中に、東地中海地域より、遠くエジプトに見出されるスカラベを多数見出した事は、文化伝播と文化圏を構想するに、重視すべき資料になるのではあるまいか。またヴィレンドルフ出土の「石のヴィーナス」が保管されているのを見出し、興味を深めた。

(9) 機上より眺望したエウボエア半島、アッテイカの、雲一つだになき紺碧の波間に光るヘラスの土地、その入り組んだ海岸線に、エーゲ海文明期より、古代東方世界、更にパックス、ローマナと謳われた地中海世界の栄光を感得する。

アテネを振り出しに、アッテイカ、アルゴリス、ラコニア、メッセニア、アルカディア、エリス、アケーア、デルフィ、フォキス、ボエチアの各地域、つまりミケーネ文明、ヘラス文化史上、著明な史跡を探訪する。特にミケーネ、ティリンスの遺跡は論を俟たぬとしても、アルゴリス地区のナアウブリオン、スパルタ郊外のミステリアにギリシアポリス構造の特性を窺うことができ、またヘラスの風土(地質・地形・気候)に根ざしたその産業景観は、印

欧語族集団としてのギリシア人の秀れた生活技術と、内陸アジア乾燥地域と関連する農牧文化を知るのに十分見こたえするものであった。

(10) 一転してエーゲ海に出、クレタ、ロードスを訪ねる。クノッソス、フェストスを通じて、クノッソス文明と古代エジプト、更にミケーネ文明との関連性を、特に建造物、絵画、彫刻、金属器文化、泥土文書、印章、墓葬形式等を通じて窺い得た。更に、金細工文化等から、スキタイ、ハルスタット文化との関連性も考えられる。殊にクノッソス博物館所蔵の文化財は、これらの知見を与えてくれるものとして、圧巻であった。

(11) イスタンブールにおいて、ビザンツ帝国時代の城壁、殊に海岸に築かれた要塞線を生々しいだけに、構造上、正しく、一見に価した。

(12) アンカラより、待望のヒッタイト遺跡のボガズキヨイ、ヤズルカヤ、アルジャー・ヒュックを訪ねる。ボガズキヨイの神殿址は、なお西ベルリン大学の手によって、発掘中で、非常に貴重な史跡を見学することができた。ヒッタイト村落址としては、アルジャー、ヒュックに非常な興味を覚える。現存部落において、今なお同民族の生々しい生活実態と伝統とを理解することが可能であった。アンカラ所在のヒッタイト文化博物館は、前二千年紀にコーカサスを越えて、南ロシア草原地域より侵入した騎馬民ヒッタイトの文化財を、丹念に蒐集整理してあるだけに、学術的意義は極めて高く、付設の文化研究所と共に、ヒッタイト学のメッカとして知られている。

更にボルギンにおいて、フリギア文化の遺跡を見る。目下ベンシルヴァニア大学調査団の手で発掘中であり、神殿址・王宮址等が小高い丘上にその姿を漸く現わしつつあった。カイセリ迄、車を駆り、この間、アナトリアの草原環境、キャラバンサライヤ、遊牧民の生活、天幕生活と、包を四輪車に載せて移動するIIを実認する。ネビシヒルを中心とし、ウルギユツプ、ギヨレメにおいて、石灰岩質の岩山を開削した特異な住居址と、ビザンチン式教会址、デリン

クグまで約十キロの地下を開鑿した地下都市カイマクリ(地階十階)を調査した。イスラム教徒の迫害に耐え抜こうとするキリスト教徒の生への執念を感得する。

(13) エジプトのサツカラにおいて、マスタバ(階段上ピラミッド)群を実認し、古王国時代のピラミッド製造の技法と壁画に著るしい興味を覚えた。特に参観を許された、カルナック所在、王家谷のツトメス三世の墓所、また十九王朝の彫刻家の墓所、カイロ博物館所蔵の歴代ファラオのミイラに感銘を深くする。またアスワンに設けられたナイル水量計は、十一王朝、プトレミー王朝、ローマ帝政期のトラヤヌス期のものが比較され、また、如何にエジプト農耕が、ナイルの流量量の増水、減水に依存するかが理解されよう。更にアスワンに、ツトメス三世の妻が、自らのために造らうとさせたオペリスクの伐石場があり、工事中止となったため、オペリスクを切り出す工法も理解できた。

(14) レバノンのトリポリスにおいて、その都市遺跡の垂直的变化を確認した。ローマ期・ビザンチン期・アラブ支配期と、工法、資材の点でも異なっている。

近くのネクロポリスは、生々しい石棺墓群の発掘直後と推定される。

ベイルート北方の「犬の川」岸に在る幾多の戦勝記念碑はオリエント世界よりこのかた第二次世界大戦に至る間、このダマスクス街道を通過した戦勝の王、將軍の記念像で名高い。特にシリア遠征を行なったエジプト十九王朝のラーメス二世とオリエント世界を最初に統一したアツシリア王エザルハドンの両雄が相並んで彫刻されているのは、交互に勝敗したオリエント世界の象徴ともいえる。

ビブロスでは、フェニキア期、ペルシア期、アレキサンダー大王時代の住居址が、水平的に、中心から外へ拡大しつつ展開している。特にペルシア期城門に、ライオン像一軀が彫刻されているのは注目に価した。ベイルート博物館に

は、エジプト文化が多く収蔵されている。ヒッタイト軍団と雌雄を決した十八王朝ツトメス三世、十九王朝ラーメス二世期に、如何にこの地域が、エジプト軍団の勢力下におかれていたかを立証するものであった。サイドに残る十字軍時代の海城も、保存の価値がある。

(15) サイプラスに渡り、東地中海世界の文化交流の状況を、同博物館所蔵の文化財で確認する。東地中海へ伝播した新石器のオリエント農耕文化の土器に特色的なものが多く、また前三千年紀以降の青銅器に動物文様、動物意匠が数多く見られ、スキタイ式金属文化が金細工動物交嘴の状態を確認される。

前十二世紀以来、西紀七世紀のウマイア王朝サラセン期迄東地中海の海上要衝として重きをなした、カンタラ城は、ファマガスタ城と共に十字軍戦争のとき、再び史上に名を残している。両城の城砦構造に多大の興味を払らう。ヘレニズムの遺構を伝えるサラミスもコリント式列柱構造として特異なものである。

(16) 再びベイルートに出て、ローマ帝政期、対バルチアの前衛都市として栄えたパール・ベックを訪ねる。「犬の川」を経て、ダマスクスに至る要衝に築かれた神殿都市であり、それだけに当時のローマの国力の象徴とみなしてよい。

(17) バクダート博物館所蔵の文化財は、わが江上波夫教授の指導によって、整理されている。真に見ごたえある逸品揃いで、古代オリエント文明の歴史が、各期毎に十分に理解された。私は特に前三千年紀以降、アツシリア期のものを数日間、丹念に調査した。またベルシア帝国成立期の文化財にスキタイ風文化が、当然のように現われて、サカ文化の浸透と見られている。

カルバラより二十五キロ（バクダードより西南約百三十キロの地点）オハイダルへの途中、砂漠道路に沿い、ティグリス河の氾濫湖に面する地域に、岩砂漠地形末端の断崖を利用して、開削した住居址らしきものを発見する。かな

りの広面積で、中心部はテル型の岩山であり、その北東は氾濫湖へ向って傾斜する断崖、それぞれに見事な開削住居が指摘される。開削壁面はきれいに彫刻されており、立柱の構造を現示している。中に羊等の骨片が散在している事から、今日、遊牧民に利用されている向きも考えねばならない。バクダード博物館でこれが確認を求めたところ、遺蹟台帳には記載されていない。博物館の専門学者達の見解に依れば、その発見地が、ティグリスに沿って、ヒルラとダマスクスを結ぶ、バルティア期のオアシスルートに当たっている事等から、或いはバルティア期の都城址ではなからうかとの説も打ち出された。後日、改めて、再調査することを約した次第である。

バスラより往復約四百キロ、砂漠の中を走って、ウルジグラード寺院、シユルギ王墓等を訪ねた。ティグリス氾濫原に埋れたウル王墓は正に特異な構造である。またその農家の構造とその生活を観察する。熱砂に生きる住民にとって、天日の利用と水の発見、利用法が如何に重大であるかを確認した。ナツメ椰子栽培の意義も、乾燥気候に対抗する水源獲得の手段に他ならない。

ナイジリア付近の灌漑法（掘抜井戸の周囲を、馬を廻らせて、水を汲み上げ）にエジプトのメンフィス付近で、見出した方法と一は共通し、更に後者のものに、人力による水路の用水転換の技術を認めた。

砂漠に生活する遊牧民にとって、ラクダはロバと共に荷車であり、乗用車であり、且つラクダ乳は重要な日用食料源であり、山羊、羊と共に正しく人間の伴侶といえる。

モスールより、アツシリアの旧帝都遺跡であるニムロド、アツシユール、ニネヴェエールに向かう。アツシユールの廢墟に立つ時、感慨無量であると共に、その遺跡の構造に目を引かれた。日焼き煉瓦の組み合わせで、よく往時のものが、墳墓の側壁と天井に残されている。また変性長石岩（かなり硬度のもの）が、部屋の間切り、構造に使用されており、これに日焼き煉瓦が組み合わせられ

ているのは、興味をひく工法だ。

ヘレニズムの遺跡では、保存修復の行き届いているハトラ、クテシフォンも訪れた。

(18) テヘランで、博物館を見学し、特別許可を得て、「金の部屋」を参観した。見事なスキタイ金属器文化、馬具文化を知ることができた。

イスファンで都市近郊の沙漠地域にカナリトを見る。その地形的位置、開削深度と距離に注目したい。つまり地下水位は山々の傾斜地より、平原地に移行するにつれて次第に深くなっていく。カナリトには種々の型があるが内陸アジア乾燥気候特有の地下水道であり、ここでは、隣接の鳩の塔と一対の好対照を示めず。シラズよりベルセポリス、パッサルガデー(キロス王の都市)を訪ねる。ベルセポリス宮殿の、クセルクス王宮の階段に、統一諸国よりの朝貢使が彫刻されているが、その内に遠く塞族王ティグラハウダよりの朝貢使が、駿馬を引いて登場してくることは、史料的に興味ある事である。それに見られる戦士の服装、帯剣、馬型、馬具にスキタイ風サカ族文化の浸透と、内陸乾燥アジアに共通に展開した騎馬民俗文化特性の一端が窺知されよう。特に馬型は、中央アジアの「馬」を知る上に重要な手がかりとなる。

また、ダリウス一世王墓下において、ササン朝ペルシアのシャープル二世が、ローマ帝国ヴァレンスの忠誠を得ている彫刻も興味深かい。

キロス王墓は六階段式のマスタバの一種であり、後の支配者、アラブの墳墓群に取り巻かれているのも、印象に残る。

(19) カーブル博物館で、特にヘレニズム文化の象徴ともいえる可き、仏陀彫刻、更に、オリエント、インドとの関連から、彩陶類、印章に注目した。

海拔約二千メートルのパーミアンに向かう。チンギスハンの攻撃根拠地として營造された城砦レッド・シティ。チンギスハンによって滅亡した白骨の丘を見る。更に興味をひいたのは、パーミアン川によって開析された、附近一円の

ヒンヅークシュ山系の斜面に、住居址が開削されていることであり、中でも斜面に彫刻された大仏二体(磨崖仏)と壁画とであった。好機を得て名古屋大学 の仏陀測量調査団に邂逅し、仔細に見学することができた。

これら城砦、住居营造の工法及び文化財と、前述、トルコのウルギユツプ、ギョレメ、カイマクリにおける住居营造工法とを併せ考えると、類似の環境において私の発見した、イラク、オハイダル近傍の都城址についても、共通した構造上の判断が得られよう。

パーミアン付近の農家様式の特色的な配置は、天日製煉瓦造の高い土塀を周らし、望楼を四隅に持ち、氏族の紋章を塀に彫りつけている。周辺の農耕地にも、竹、木製の囲いがあり、その中でブドウ、トウモロコシ等が栽培されている。簡易天幕を張って、野営する遊牧民が、彼らの生活と交錯する故である。桑は原生の大樹、隣国のタジックスタン、ウズベキスタンと農作景觀は共通している。

海拔三千四百メートルのサロン峠を越えて、トハリストアン迄ドライブした。ヒンヅークシュの峻険を越え、アムダリアへ流れ注ぐ街道を北上する。高地へ入るにつれて、積石構造の住宅を見る。桑の大樹、白樺、ポプラの群生地帯を通る。既述のバダクシャンルートを考えるのに、ふさわしいコースとなった。

カーブルを発ち、機上よりカイバル峠を見取めて、パキスタン国境へと、航空機は進んでいく。機上より眺めるアフガニスタンの一目、灰色の丘陵、高原地帯、しかしそこには、点々とオアシスに支えられた緑野あり、かつ岩石を噛んで流砂に落ち入るせせらぎあり、そうした乾燥環境のもつ総体は、不思議な魔力をもって、そこに生活する集団をとらえている。イスラムへの祈りと太鼓

の音（打楽器は、シユメルの農耕民文化の中に創造され、乾燥地域に生活する集団の最重要な楽器となる。）とが地上より響いてくる。乾燥世界の独得な色彩である、美しい太陽、澄み切った青い大空、故に、乾燥環境に生活する集団にとつて、太陽は最高神であり、大空もまた神格を有している。カラカラに乾き切った砂漠にも、生命力は存在する。高峻な山岳は水を湧かし、その水が大を養ない、人と人の文化を育くましめる。水をいかにして発見し、水をいかに利用するか、ここに環境の命令権を越えて、人がいかにその生活環境を克服するか、この知恵と努力とによつて、乾燥地帯文化の進展がはかられる。一般に環境の諸要因は、人によつて利用されるか、されないかの機会、あるいは、人によつて克服されるか、されないかの、障害の何れかを人に提供する。

内陸アジアの東西を貫通する共通の乾燥環境は自ら、そこに類似、もしくは共通な文化諸特性の伝播を容易ならしめ、ほぼ画一的な文化を形成させる。軍事力を伴なり或る強力な集団が現出する場合、その統制力は当然のように、広範囲にまたがる。そして文化圏は、漸次的に文化の共通要因をきつなとして、地域的に変異する。

かくして、中央アジア、イラン高原、アナトリア高原、またシリア、レバノン、エジプト、エーゲ海域を含む東地中海世界、更には極東アジアが類似環境を要因としてつながり合い、そこに作り上げられた共通もしくは類似の文化特性、更には特性複合体を伝播し合い、地域的に文化変容を形成し合う。

このような事を考えている間に、次第に眼下の世界は性格を変えてきた。航空機はスレーマン山系を越えパンジャブを通り過ぎた。インダスの彎曲が、緑野の中に光ってくる。多分ラホールの町であろう。景観は一変し、低湿地が随处に散見する。沼沢の中に、部落が沈んでいるような光景である。溢れる水、水の中に浮かんでいるような農村、緑の世界が一斉に開ける。それほど乾燥世界と、湿润農耕世界とは、環境を異にし、従つて文化性も当然異なってくる。

パンジャブへ、アムダリアを溯り、ヒンズークシユの峻険を越えて進入してきたインド・アリア族が、リグ・ヴェーダにおいて、インダスを彼らの母と讃仰し、母なる大地と呼びかけ、そこに次第に定着化してきた社会的理由と、人間的心情は、容易に理解される。かように考えている裡に、わが航空機は、最終の目的地であるインドのニューデリーに着陸した。湿润、高温の熱風が乾き切ったわが肌を一瞬に湿めらせ、身の丈の二倍もある、茅芒の叢が湿風に、穂をなびかせている。環境の変異は余りにも著るしい。

（本学教授・東洋史学）